

放流技術開発調査（ヒラメ）

小田切譲二・小倉大二郎・池内 仁・奈良 賢静

発 表 誌 名

昭和59年度放流技術開発事業報告書（ヒラメ班），昭和60年3月，P 9～19

抄 録

1. 59年は異常低水温の影響により，天然の稚魚の着底期は例年に比べ1～2旬遅れた。稚魚の生息尾数は620万尾と推定されたが，これは55年以降では最高であった。
2. 稚魚の食性は，58年には全長5cmで主餌料がアミ類から魚類に変わり56，57年に比べ小さなサイズで転換していた。環境中のアミ類は4属7種で，*P.ornata* が最優占種であった。稚魚は摂餌の際，アミ類の種を選択していなかった。
3. 人工種苗を放流した時の再捕例では，これまでの最大移動距離は40kmにすぎず，天然魚の例（平均距離，北上20km，南下40km）と比べ移動は狭い範囲にとどまっている。
4. 天然魚の体色異常（無眼側）の出現率は，59年0才魚は1.9%と例年より高かった。1才魚以上は7.0%であり，銘柄別にみると「小」以下は7%以下で，「中」以上は9～50%であった。